



一橋の女性たち

第32回

一橋大学には、ユニークでエネルギーギッシュな女性が豊富と評判です。

彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

第32回は、元内閣府特命担当大臣（経済財政政策担当）、政策研究大学院大学教授の大田弘子さんと、聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

ラン、ラン、ラン、ラン、ラン、ラン、ラン！

キャンパスを走り回っていた学生時代

山下 大田先生は女性として初めて内閣府政策統括官に任命され、安倍・福田両内閣で内閣府特命担当大臣（経済財政政策担当）を務められるなど、活躍は広く知られています。官界に入られる前は、企業に勤めた経験もお持ちです。「一橋の女性たち」として、輝いている先輩の1人であり、どんなふうに進んでこられたのかとても気になる存在だと思います。そのあたりを説明する意味で、まず一橋大学に入学された前後から伺いたいのですが、鹿児島出身の女性としては初めて一橋大学に入学されたそうですね。

大田 はい、そうです。同期に徳島県出身の女性がいるのですが、彼女も徳島初でした。当時は、



大田弘子（おおた・ひろこ）

1976年一橋大学社会学部卒、株式会社ミキモト勤務、財団法人生命保険文化センター勤務を経て、1996年埼玉大学大学院助教授、1997年政策研究大学院大学助教授、2001年同大学教授として教鞭を執る。2002年より内閣府参事官、大臣官房審議官、内閣府政策統括官（経済財政分析担当）を歴任。2006年より内閣府特命担当大臣（経済財政政策担当）。2008年より大学に復帰。著書に『リスクの経済学』（1995年、東洋経済新報社）、『良い増税 悪い増税』（2002年、東洋経済新報社）、『経済財政諮問会議の戦い』（2006年、東洋経済新報社）、『改革逆走』（2010年、日本経済新聞出版社）など。

政策研究大学院大学教授

大田弘子氏



Hiroko Ota

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

女の子を1人で東京の大学へ進学させるという

のは、親のほうも抵抗がありましたね。我が家は、祖母や大伯母が焼酎を飲んで踊りを楽しむというような、南国的な朗らかな家庭でしたが、娘を東京へ行かせることには反対でした。進学するなら鹿児島大学の大学か、せいぜい、福岡の九州大学まで。それも、できれば行かないほうが良いという考えでした。鹿児島はおおらかな半面、出る杭は打たれるというような土地柄ですから、脱出したかったですね。担任の先生にも、女子を一橋大学に入りたいという気持ちがあり、応援してくれました。「九大へ行くのも東京へ行くのも列車に乗るのは同じ。乗るのがその日か前夜かの違いだけです」という変な理屈で、母を説得してくれました(笑)。

山下 一橋大学を選ばれたのは、どうしてですか。
大田 当時の受験雑誌『螢雪時代』で「武蔵野に眠る商学の殿堂」と紹介されていた写真に惹かれたからです。緑がとても美しく、素晴らしいキャンパスだ、ここに決めよう、と(笑)。でも、入試のときは冬で枯れ葉ばかり。その落差にがっかりしました(笑)。大学にとっても

学生生活にとってもキャンパスは、とても大切な存在だと思います。キャンパスが美しいか否かで学生時代の思い出は全然違ってきます。

山下 社会学部でゼミは南博先生でしたね。

大田 社会学部を選んだのは、漠然とジャーナリスト志望だったからです。こうなろうとか、なりたいなどではなく、ほとんど何も考えていませんでした。授業にはほとんど出ない、全く褒められた学生ではありませんでした。ゼミの南先生に「卒論の締め切りだけは守りなさい」と言われたほどでした(笑)。ただ、社会に出てから、もっと勉強しておけばよかったと心底思いましたね。

山下 今と比べてずっとおおらかな時代だったと思えますが、ゼミに行かないというのはすごいんですね(笑)。何かに熱中されていたのですか。
大田 ひたすらグラウンドを走っていました。高校時代は体操部に入っていて、身体を動かすことがとても好きでした。大学でも運動をやりたいと思っていましたが、同好会レベルでは嫌で、体育会に入らなかったのです。その頃、女子学生は30人程度でしたから、バレーボールやバスケットボールはできなかったんですね。1人でもできるものをと、陸上部に入ってキャンパスを

閉ざされていた、女子大学生の就職

隅々まで走り回りました。

山下 陸上部は、男性ばかりだったのでは？

大田 50人の部員のなかで女性は私1人でした。でも、格別女性を意識することはなかったですね。先輩たちからはかわいがってもらいました。同期とは男同士(?)のつきあいで。いろいろな意味で鍛えられましたね。

閉ざされていた、女子大学生の就職

山下 女性の就職環境は、男女雇用機会均等法施行の前とあとでは格段の違いがありますね。大田先生の頃は、大変だったのではないですか。

大田 当時はまだ指定校制度がありました。一橋大学でも男子学生はもちろんOKでしたが、女子学生は指定校に入っていなかったのです。いわゆる大手企業への道は閉ざされ、新聞の求人欄で仕事を探すような状況でした。特に、自宅通勤でないというのは致命的にマイナスでした。私はマスコミ志望でしたが、新聞も出版も女子の採用は全くなし。卒業時に就職先は決まっていませんでした。ある出版社の社長が社内報の仕事は出版のプロセスを学べるとアドバイスしてくれ、社内報担当を募集していたミキモトに入社しました。ここでは人間関係にとっても苦勞してすぐにも辞めたくなりましたが、安易に辞めたら後輩の女性の道を閉ざしますから、何があっても2年間は辞めるわけにいかなかった。

その後、父の病気で一時、鹿児島へ帰っていましたが、先輩である高原須美子さんの紹介で財団





法人生命保険文化センターに研究員として再就職しました。

山下 それが大田先生のキャリアにとって一つの転機になったのではないですか。

大田 気持ちの面で大きな転機でしたね。金融の自由化が始まり、高齢化が社会問題になり始めた時期に研究員としてリスタートしたわけですから、初めて向学心に燃えましたね。そこで、一橋大学の大学院に行きたいと思ったのですが、当時は働きながら大学院に進学できませんでした。

その頃、大阪大学から東京海上火災保険(当時)の寄付講座で「リスクと情報の経済学」を教える



いかというお話をいただきました。学生として学ぶより教えるほうが身につくだろうと考えてお受けしたのですが、考えが甘かった(笑)。1回90分、毎週違うことを話さないといけないでしょう。教えることがこんなに大変だとは思いませんでした。でも、大阪大学では皆さん温かく迎えてくださったし、同僚の大学院の講義にも出させてもらって、幸運だったと思います。

官僚の世界や内閣の場を経て、今はまた大学に戻っているわけですが、大学ほど職場として自由と安定が両立している場はありません。どんなに批判的なことを言っても、生活は守られている。だからこそ、この自由を大事にして、果たさねばならない責任があると思いますね。ときには勇氣を持たねばならないし、まして御用学者になどなったら、社会に申し訳ないですよ。

「パブリック・スピリット」を胸に、政策の現場へ

山下 大蔵省や通産省の審議会のメンバーになられたことが、内閣府参事官になられ、2003年の内閣府政策統括官に任命されたことにつながると思いますが、そうした立場で霞が関に飛び込むことをどのように受け止められていたのですか。アカデミズムとは、全く異質な世界のように思えますし。

大田 経済財政諮問会議の事務方として役所と折衝する立場ですから、最初は嫌だなと思っていました。でも、悪いくせなのかもしれません。好奇心がムクムクと湧いてきたんです。もともとジャーナリス

ト志望で政策には非常に関心がありましたし、「パブリック・スピリット」は自然に持ち合わせていたと思います。何かを考えたり発言したりするとき、社会という軸を優先させるのは当たり前前のことでしたから。

山下 現実の場面では、すんなり「パブリック・スピリット」優先とは行きがたいですよ。まして、お役所と折衝する立場ですと、バトルになるのではないですか。



大田 官僚はプライドの高い人たちですからね。自分の居場所をつくるのに1年かかりました。ただ、それ以前に規制改革委員会とバトルをしていましたから、役所用語はマスターしていました(笑)。いざやってみると、役人の醍醐味はネゴシエーションです。自分は結構ネゴの世界が好きなんだ、と発見しましたね。

それに、上司に恵まれていましたし、小泉一竹中ラインの時代でしたから、自由な発想でたたき台をつくることができました。国論を二分した郵政民営化への流れをごく身近に体験し、プロセスはこんなにも大切なんだ、プロセスを変えることがこれだけの力を持つのだということを感じました。

政治の世界に行きたいとは思いませんが、現場を経験して政策とは本当に難しいものだと思いますし、経済や政策領域に携わる者として、日本経済の先行きへの思いがあります。日本経済は戦後、危機に直面するたびにそれをバネに強くなってきました。今はなかなか変革できない経済になっ

ていますが、この素晴らしい日本経済を引き継いで次の世代につなげていきたいという気持ちは強く持っています。

幸せ感が身近にある。
だから迷わない

山下 どんな人にも人生の勝負時のようなものがあると思います。ジャンプして、キャリアの花を咲かせるために、そのタイミングと自分の気力・体力を合わせることはとても難しいことだと思っておりますが、大田先生はどうお考えですか。大臣のような大役も全うされたわけですし。

大田 さすがに大臣は引き受けなくなりました。でも、大役だからかまえるとか、気負う気持ちはなかったですね。

山下 全くかまえなかったのですか？

大田 かまえる暇もなかった（笑）。何度も転職しましたが、その立場に入ったら迷いません。ずっとそこに座っていたような顔をしているとよく言われました。私は、適応力はかなりあるようです。これは昔からです。進学先を決めるときも、女子大か男女共学かということは意識にすらのぼりませんでした。役人になったときも驚くほど違

対談を終えて

「天真爛漫の泉」

御著書に淡々と記された場面の数々は映画を観ているようだ。竹中平蔵元大臣の後継者として経済財政政策担当大臣を任命されるくだり、政権交代の際、段ボールに荷物をまとめ、国会近くで待機するところ……。

読み進めるうち、政治プロセス改革としての小泉内閣とは何であったのか、というテーマにぐいっと引き込まれた。肥大化した政治＝行政組織の錯綜した意思決定プロセスを集約するバトルの最中であって、いったい、どんな精神力、体力でのぞまれたのだろう。修羅場中の修羅場を歩まれてきた方にお目にかかると思うと、こちらまでハラハラ、ドキドキ……。

研究室のドアを開けて出迎えてくださったのは、うららかな春の日のようなピンクのスーツをまとわれた可憐なお姿である。用意してくださった飲み物をすすめ、自ら、蓋まで開けてくださったではないか！ 笑顔が何と天真爛漫で、爽やかなこと！ 不思議や不思議、ハラハラがすーっと落ち着いて、とてもナチュラルな気持ちになったのである。

ヒーラーですか、大田先生は？

すっかりくつろぎ、ああ、この天真爛漫、これこそが、財政改革の修羅場を支えたのだな、と腑に落ちたのである。あらゆる利権、不理解、軋轢、矛盾が激のように埋め込まれた政治の世界での改革には、清らかな空気がさらさらと流れる場を創れる人格が必要である。

政治は妥協です。何気なくさらりとおっしゃった言葉が、心に残った。人によってはネガティブに聞こえる言葉だが、先生にあっては、マザー・テレサの言葉と重なって聞こえる。

あなたが何年にもわたって営々と築き上げてきたものを、誰かが一夜で壊してしまう：それでも築きなさい。

あなたの最良のものを世界に差し出しなさい。それは、十分ではないかもしれない：それでも、あなたの最良のものを世界に差し出しなさい。

「上善を水の如く」は、簡単ではないにせよ、努力でできそうだが、それを天真爛漫に行うのは天賦の才ではないだろうか。でもそれを天に差し出すかどうかは、その人の意思決定。先生は、天からもらった才を天に戻す名人なのだと思う。

最上善は、爛漫たる桜のごとし。 (山下裕子)



和感はなかった。その場その場で面白いことを発見してしまう、得な性格かもしれませんね。お役にのいたときも、金曜日の夕方になるととても嬉

しかった。勤め人は毎週この幸せな気持ちを味わえるんだ、いいなと思いました。小さなことで幸せを感じてしまいますから、大物にはなれないんです（笑）。

山下 目標などは立てられないんですか。

大田 私には、「坂の上の雲」はないですね。

先に何があるかも気づかず走って行って、行ってみたら崖だったというタイプですから、一年の計も立てたことはありません。

山下 もっといろいろ伺いたいのですが、

紙幅の関係もあって……。最後に学生たちへのメッセージをいただけませんか。

大田 新しい場に身を置くことは、自分を発見することでもあります。自分のことは実は自分でもわ



かっていなくて、その場に身を置いて初めて発見するんですね。だから、学生時代も社会に出てからも自分を信じて、新しいことにどんどん挑戦してほしいと願っています。